

逆鱗

げきりん



選び抜かれた俳優達の競演が始まる。

リアルではない設定を、観る人にリアルにイメージさせる。

それができる俳優達がたっぷり揃った新作は、人魚伝説がモチーフ。

架空の生物を出発点に野田秀樹は何を問う？

野田作品が俳優を選ぶ理由

すべての俳優はふたつに分けられる。野田秀樹の舞台に立てる人と、そうでない人に。

「野田秀樹」の部分に、別の演劇人の名前を入れてもこの構文は完成する。でももちろん、どんな人物でもいいわけではない。星の数ほどいる中で、ほんのひとにぎりの劇作家、演出家だけが俳優に、その劇世界に入って初めて見ることのできる果てしない風景、本人が知らなかった身体感覚を引き出す言葉、全体を俯瞰し続ける冷静さと一点集中の高揚感を同時に感じること、共演者との一体感といった特別なものを与えることができる。

と同時に、野田の舞台に参加したすべての人がその効果を充分に享受できるとは限らない。なぜなら野田作品は、時間や空間をダイナミックに飛び、その離陸や着陸のタイミングは非常に感覚的であるため、手引書を読んでそれに従えばできるようになるタイプの演技ではないからだ。リアルではない設定を、リアルなものとして観客にイメージさせる力は、どんな俳優にでも備わっているものではない。もともと持っているが、覚醒するか、実践のうちに手に入れるか、ケースはいくつか考えられるものの、野田の舞台に立つには、戯曲のポテンシャルを瞬時に把握する直感、インプットとアウトプットのきわめてなめらかな回路、受け取ったものを瞬間的に発酵させる器と、それを惜しまず出す胆力が必要なのだ。

だから厳密に言うなら、最初の一文は「すべての俳優はふたつに分けられる。野田秀樹の舞台にきちんと立てる人と、そうでない人に」とするのが正しいのだが、ではどうすれば、その区別がつけられるのだろう。観客の立場からすれば、できれば「きちんと立てる人」が多くキャストされた作品を観たいと考えるのが普通だと思う。

お墨付き揃いの豪華キャスト

実はそのジャッジがとても簡単にできる方法がある。それは、各俳優がNODA・MAPへの複数回の出演経験があるかどうかで判断すればいい。NODA・MAPは基本的に、公演とは直接関係のないワークショップで、まず俳優が野田と出会うことが多いので、稽古で初めてお互いを知るケースは少ない。それでも稽古と公演の数カ月で、ぐんぐん伸びる俳優や、本番の舞台に立って突然化ける俳優、何度やっても飽きない俳優もいて、そうした中から「野田の舞台にきちんと立てる人」が残っていく。そうしたプラスアルファのある人が、幸運にもスケジュールが合うと、NODA・MAPに再出演、あるいは何度目かの出演となるわけだ。

その点で『逆鱗』は、ほとんどのキャストが野田作品の経験組という贅沢な座組が実現した。さらにすごいのが、その顔ぶれである。まず、松たか子が7年振りに戻ってくることを喜びたい。これまで『オイル』(03年)、『麗作 罪と

罰』(05年)、『パイパー』(09年)と3作のいずれもで、松が立ち上げたものは素晴らしく大きかった。やわらかで理知的でよく通る声で、どんなに理屈に合わないせりふも、逆にロジカルなせりふも、観客の中に鮮やかなイメージを広げることができる。最初の一文に戻るなら、松は、蛭川幸雄や岩松了ら、野田同様に俳優を厳しく選ぶ現代の日本の演出家すべての作品でヒロインを演じており、そんな才能は他にない。

そして瑛太と井上真央は、3年前の『MIWA』でNODA・MAPに初参加したふたりだが、どちらも見巧者をうならせた。美輪明宏氏の半生を縦軸に、第二次大戦からの日本の復興、芸術家と周辺の人々、少数派の矜持、宗教などの問題を色鮮やかに絡ませた同作で、瑛太は、物語に踊らずしっかりした軸を内面に持ち続けて宮沢りえ演じる主人公を受け止め、また井上は、瞬間的に変わるストーリーの波頭を次々と捉えて乗りこなし、上演では語られない時間を彼女の身体の中に宿らせていた。どんなに映像でいい演技を見せても舞台上では光らない俳優もいる中で、ふたりは「どちらもできる」俳優であることを証明したのだ。

また、これもうれしいことに「野田作品の阿部サダヲ」が12年ぶりに見られることになった。『ローリング・ストーン』(98年)、『透明人間の蒸気』(04年、新国立劇場主催公演)と出演本数は少ないが、特に『透明人間〜』で見た阿部の演技は、多くの人にあの舞台を忘れられないものにし、野田作品と阿部の相性の良さを強く印象づけた。軽やかゆえに深いところまで斬り込み、観客が気付いた時には、心の奥底に傷跡をつけられているのが阿部なのだ。その姿がまた見られるのは期待しか湧いてこない。

だが、気心の知れた安全パイばかりではつまらない。予定調和を好むなら、舞台などつらなくても、また、観なくてもいい。ここに新鋭・満島真之介が絡むのが、期待値を一気に押し上げる。映像でも幅広く活躍する満島だが、舞台でも2010年の『おそろい親たち』を皮切りに着々と経験を積み重ね、特に『祈りと怪物〜ウィルヴィルの三姉妹〜』(13年)、『火のようにさみしい姉がいて』(14年)、『ハムレット』(15年)と毎年、蛭川幸雄から声がかかるなど

実力を蓄えている。いわば満を持してのNODA・MAP初参加で、どんな活躍をするか注目したい。

ここに、百戦錬磨のベテランで、野田が心から頼りにする銀粉蝶と池田成志が加わって、作品にメリハリを効かせながら屋台骨を支えていく。さらに忘れてはならないのが、野田が時間をかけ、着々と強化を図っているおなじみのアンサンブルチーム。昨年、パリのシャイヨー劇場で上演され、絶賛を集めた『エッグ』で現地の評論家から高く評価された実力が、今回もいかに発揮されることだろう。そしてもちろん、NODA・MAPに出演する俳優全員が口を揃えて、開演前は「共演したかった」、開演してからは「驚いた」と話す俳優・野田秀樹の活躍も、楽しみだ。

人魚の謎を入りに、遠くへ

『逆鱗』は、人魚にまつわる伝説が大事なモチーフになるという。言語や文化が異なっても、なぜか世界中に存在する半人半魚の生き物をめぐる話。有名なのは、人魚が恋に殉じるといふアンデルセンが童話にした物語だが、その歌声に心を奪われた人間が海に引き込まれて命を落とすというセイレーンの伝説も存在する。また日本にも古来から、人魚の肉を食べたものは不老不死の命を得るといふ伝説がある。古くから存在する物語と、最先端の科学技術、歴史上の出来事や実在の人物を、錬金術のようにつなぎ合わせるのには野田の得意技。今回もきつと、華やかな出演者、めくるめくストーリーに目を奪われるうち、あっという間に人類全体サイズの闇をのぞき、はたまた、光を浴び、宿題を持ち帰ることになると予想される。

しかしそれは、演劇でしか得られない体験だ。劇作家の妄想と俳優の声と肉体を借りて、観客は自分だけの過去や未来を観る。この格別な体験をどうか逃さないでほしい。

文：徳永京子



1月29日(金)~3月13日(日) プレイハウス

詳細はP12、13、15へ

作・演出：野田秀樹 出演：松たか子／瑛太／井上真央／阿部サダヲ／池田成志／満島真之介／銀粉蝶／野田秀樹



※大阪、北九州公演あり

〔東京公演〕主催：NODA・MAP
共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)



Stoik



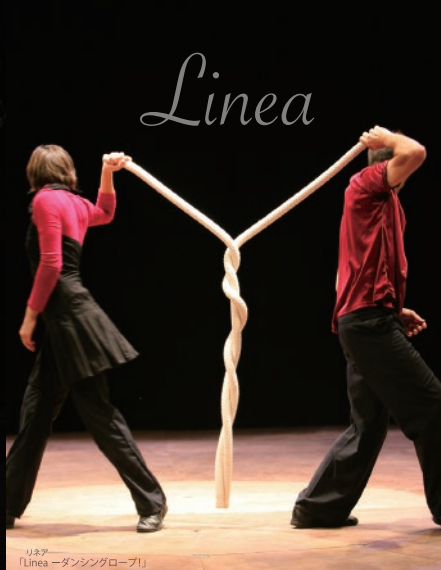
「ストイック」©Dominique Hogard

Men with Soles of Wind



「空飛ぶ男たち」©Mariana Chama

Linea



「Linea - ダンシングロープ」

TACT FESTIVAL 2016

楽しくってマジカルな、
カラダの魔法が
あふれ出す!



「ひつじ」©Gary Mulcahey

いま最も面白い「サーカス×ダンス」! 大人から子どもまで、
ビックリそして笑っちゃう、不思議なパフォーマンスたちがやってくる!

予想のつかない、4つの魔法がかかった舞台

いま最新のサーカスは、ダンスの分野で花開いている。

ダンス的な高い芸術性で、サーカスやジャグリングが持つ驚異的な動きを様々に活かしながらかせていく……そんな舞台が増えているのである。「大人も子どもも楽しめて、しかも芸術的な充足感のある舞台」というわけだ。

これは世界的に見ても大きな流れになっていて「アート・サーカス」とか「コンテンポラリー・サーカス」などと呼ばれている。そうした世界の最先端をピックアップして毎年紹介し、家族全員で楽しめると評判なのが、このTACT/FESTIVALだ。

これまでで多くの摩訶不思議な舞台を紹介してきたが、今回は4つの作品をお届けしよう。

ソラス・デ・ヴェント『空飛ぶ男たち』。ブラジル人とフランス人の男性二人が演じる舞台は、現代の空港だ。入国審査で止められた二人がスーツケースを抱えて空港で過ごす……しかしそのほとんどは、空中にいるのである。ハンモックやらロープやら、あれこれ駆使してどんどん居心地が良くなってしまふ。言葉のない空中パフォーマンスなのだが、アクロバットではない。これはまるで、二人が遭遇している「宙ぶらりんな状態」を象徴しているかのようだ。初めは反目している二人だが、同じ苦難を共有していくうち、次第に心が通い合う。動きの楽しさばかりでなく、芝居を一本見たような満足感の高い作品である。

カンパニー・レ・ギューム『ストイック』。これは何とも不思議な味わいの作品。大きな男と小さな女のデュオなのだが、男が手を上げると女がその脇の下をスタスタ歩いてしまうほどの身長差がある。靴、椅子や机といったシンプルな舞台ながら、それらを様々な組み合わせたり歌ったりと変化に富んでいる。二人の織りなすコミカルな身体的やり取りが、どうにも愛らしく、幸せな時間が流れる。

カンパニー・ドゥッシュドゥッスウ『Linea - ダンシングロープ!』。これには驚かされた。使うのはロープのみ。といっても綱渡りとかよじ登るといった使い方ではなく、「ロープが主役」といっていい存在感なのである。ロープを速く動かすと、しなり、くねる。輪にしたり、固めたり、まるで生きているかのような、じつに多彩な表情を見せるのだ。それを男女のアーティストが変幻自在に操る。手品のような不思議な展開もあり「ロープって、こんなにできる子だったの!？」と認識をあらためること必至の舞台である。

そしていまやTACT/FESTIVAL名物、といっても過言ではない『ひつじ』が今年もやってくる。あまりにもリアル、あまりにも無愛想なひつじたち。なにをするかという、これといって何もしない。ただそこには「ひつじの日常」があるだけだ。メエと鳴き、歩き回り、何かを食い、何かを排泄する。一切の媚びのないその姿に、かえって惹かれてしまうこの気持ちはなに!? という思いを胸に、今年も会いにいこうじゃないか!

文: 乗越たかお(作家/ヤサくれ舞踊評論家)

ソラス・デ・ヴェント 「空飛ぶ男たち」 シアターイースト
カンパニー・レ・ギューム 「ストイック」 シアターウエスト
カンパニー・ドゥッシュドゥッスウ^{リニア} 「Linea - ダンシングロープ!」 シアターウエスト

料金:【全席指定】大人2,000円 子ども(高校生以下)1,000円
<3演目セット券>大人4,800円 子ども1,800円
<2演目セット券>大人3,500円 子ども1,500円

一般発売:3月5日(土) 予定

劇団コブス
「ひつじ」「キャンプしましょう! おひめさま」ロワー広場【観劇無料】

TACT/FESTIVAL 2016 スケジュール			
	シアターイースト	シアターウエスト	ロワー広場
5月5日(木・祝)	[A] 13:30	[B] 16:00 / [C] 18:00	14:45(ひつじ)
5月6日(金)	[A] 13:30	[B] 11:00 / [C] 16:00	14:45(ひつじ)
5月7日(土)	[A] 13:30	[C] 11:00 / [B] 16:00	14:45(おひめさま)
5月8日(日)	[A] 13:30	[C] 11:00 / [B] 16:00	14:45(おひめさま)

[A]=「空飛ぶ男たち」 [B]=「ストイック」 [C]=「Linea」
主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)